

校長室の窓から

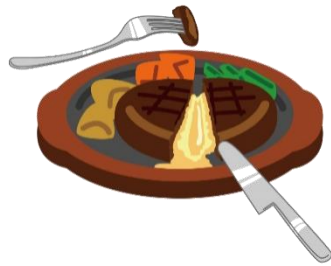
人生は一篇のサスペンスである

～ 我が家のある晩の出来事 ～

先週、夕食を作っている妻を見るとハンバーグができてつある。
『今日はハンバーグか。』と、好物を楽しみにしていました。

食卓につくと、ハンバーグは妻の前に一つ。私の前にはない。

しかし我が家では、特に私がコレステロールとか糖質とかを気にしなくてはいけないお年頃なので、いろいろなものを半分ずつ分け合って食べるがよくあります。というか、妻によって半分持ち去られるがよくあります。だから、その日もいつも通りに半分なんだと思っていました。



ところが、いつまでたっても「残りの半分」がやってこない。ふと見ると、妻の箸は、すでに半分の国境を乗り越えて侵攻している。そして、私の領地が4分の1に…

あれっ？

これは、もしかして、最初から分ける気がない？

妻の顔をじっと観察…表情に変化なし。

『お前に食わせるハンバーグはない!』って感じ。

…利枝さん(妻の名)怒ってる。

(何かバレた…あれかな? いや、あれはバレない。じやあ、あれだ…うわっ、まずっ……)

(ここは何事もなかったかのように、静かに食事をしてやり過ごそう。)

余計なことを言わないように気をつけ、ひやひやししながら食事を済ます。そして素早い身のこなしで洗いものに。利枝さんは、きりっとした表情でお茶をすすっている。



(もう、怖いんだけど……)

(…あの湯飲み茶碗が飛んで来たらサッと下にしゃがむ…) 泡だらけの手で予行練習。

私は1.5倍速で片づけを終え、書斎へ逃亡。やっと人心地つきました。

それから30分くらいした頃でしょうか、妻が書斎に。(とうとう来た!)

「ねえ、ハンバーグ食べんかったの?」

(へっ?)

「…もしかして、なかった?」

「うん。なかった。」

「ごめ〜ん。出すの忘れとった。」

(嘘だろ、お前。)

「ねえ、何で言わんの?」

「いや、怒っとるかと思って、そっとしといた。」

「対応がおかしいから! 『怒っとる?』とか聞いてよ。」

「いやあ〜心当たりがありすぎて。」

「そうだねえ。叩いたらいっぱい埃が出そうだし。」

「そうそう。多分、叩いたら後に何も残らん。」

「全部埃ってか。」

「ははは。」

「ははは。」

久村家の、とある晩のサスペンスでした。

